

社会調査演習Ⅲ 調査実習を行いました

原口弥生(人文社会科学部教員)

申請者氏名:原口弥生(3 教員担当授業。うち原口担当学生分についての報告)

事業区分:学生の教育研究活動支援

対象学年:3 年次 14 人(うち支出者 7 人)

内容 報告項目:社会調査演習Ⅲ実地調査(原口担当学生分)

報告内容:以下に記述

1. 活動目的

社会調査演習Ⅲの「災害支援班」(原口担当)では、災害の経験と支援活動をテーマに、2011 年の東日本大震災・福島第一原発事故後に茨城県に避難されてきた方々、また避難者支援活動に関わる団体や個人を対象に調査を行いました。震災から 10 年以上経過するなかで、原発事故後に避難してこられた被災当事者の状況も多様であり、その多様な状況についてまず理解し、それらの背景について明らかにすることが第一の目的でした。さらに現在も避難者支援活動は、避難元の福島県内ならびに避難先地域において継続しており、支援活動の現在と課題について明らかにすることを第二の研究目的としました。

2. 活動内容と成果

東日本大震災から 10 年が経過する中、行政や民間団体によりさまざまな復興政策や避難者・被災者支援が展開されている状況ですが、それが当事者のニーズに応えているのか、という点は学生の素朴な問い合わせでした。また支援活動についても、支援活動に関わる方の問題意識や支援活動に関わるうえでの困難、今後においてどのような活動が必要とされているのか、等が学生から問い合わせとして出され、研究テーマへつながりました。支援活動と言っても、行政が行う支援活動や企業や民間支援団体が行う活動では、目的やアプローチも異なります。学生はそれぞれに自らで依頼先に連絡を取り、福島県など県外を含め自主的にインタビューを行ってきました。今回、オンラインでのインタビューを取り入れたため、北海道や埼玉県など茨城県外で活動される方からもご協力いただき、茨城県内の支援活動との比較が可能となった点は、大きな成果となりました。

10 年以上に及ぶご経験を数時間のインタビューで聞き取れるはずもなく、学生がうかがったお話は断片的な記録・内容です。それでも、今回 14 名の学生が真摯に被災に向き合い、少しでも被災や支援活動についての理解を深めようとした軌跡であることは間違ひありません。

3. 訪問先の一部

「災害支援班」では、インタビュー調査に加え、被災地の現状を知るための現地視察を行いました。支援活動を肌で感じることの重要性から、特定非営利活動法人ビーンズふくしま様のご協力を頂き、福島県南相馬市、富岡町、郡山市でのママカフェに学生がスタッフ（ボランティア）として参加させて頂きました。インタビューでは得られない、現場の雰囲気や支援者と当事者の会話など貴重な機会を頂きました。後援会費からのご支援により交通費の一部を補助していただいており、感謝申し上げます。



福島県浜通りの視察、東日本大震災・原子力災害伝承館訪問

（福島県双葉郡双葉町）2021年11月3日



ママカフェ@郡山（写真・左）

2021年12月15日

ママカフェ@富岡（写真・中、右）

2021年12月7日